平成２９年度第１回弘前市総合教育会議　会議録

日時　平成３０年３月１９日（月）
午後２時から３時１０分まで
場所　岩木庁舎２階多目的ホール

◇議事日程

１　開会
２　市長あいさつ
３　議事
・協議事項　「地域コミュニティの活性化について～地域とともにある学校～」
４　閉会

◇出席者

弘前市長　葛西　憲之、教育委員長　九戸　眞樹、教育委員　前田　幸子、
教育委員　澤田　美彦、教育委員　高木　恵美子、教育長　佐々木　健

◇司会及び説明のため出席した者の職、氏名

教育部長　　野呂　忠久
生涯学習課長　戸沢　春次

◇その他出席した者の職、氏名

教育委員会理事　　奈良岡　淳
教育政策課長　　鳴海　誠
学校づくり推進課長　三上　善仁
学務健康課長　　中田　和人
学校指導課長　　木村　文宣
教育センター所長　　石川　みどり

午後 2 時 00 分　開会

○市長（葛西憲之）

会議の開催にあたり一言ご挨拶を申し上げます。

弘前市総合教育会議、これは教育委員会制度改革の一環として、連携を一層強化しながら教育行政の推進を図ることを目的に開催いたしております。

昨年度は、「重点的に取り組む教育施策について」教育委員の皆様と意見交換しながら共通理解を図ってまいりました。

本日は、「地域コミュニティの活性化について～地域とともにある学校～」としてございます。近年、人口減少、高齢化や価値観の変化等により、地域コミュニティを維持していくことが課題となっております。今後、地域課題がますます多様化･複雑化することから、地域全体で支えあい、取り組むことが必要であります。その中心的存在が学校であり、地域の公民館であります。地域と連携･協働することでお互いを活性化していくことができると考えており、次の経営計画における重要施策の一つとして、地域コミュニティの活性化に重点的に取り組むこととしております。

つきましては、教育委員の皆様と議論を交わしながら方向性を共有し、一致して教育行政を推進していきたいと考えておりますので、本日はよろしくお願いいたします。

○市長（葛西憲之）

それでは協議に入りたいと思います。

協議事項は、「地域コミュニティの活性化について～地域とともにある学校～」です。

まずは、事務局から説明をお願いします。

○生涯学習課長（戸沢春次）

４月からいよいよ小中一貫教育が全中学校区で始まりまして、コミュニティ･スクールを含む地域学校協働システムも順次始まってまいります。教育自立圏につきましては、来年度からの経営計画の中でリーディングプロジェクトの１つとして、地域コミュニティの活性化を図るために必要な事業として位置づけているものです。

これまで、学校が抱える問題については、地域の協力を得ながらも、どちらかというと学校側で解決するという考え方で進んできたように思いますが、学校が抱える様々な課題は、地域と密接に繋がっていて、実は、地域にとっても課題解決となるものですので、地域学校協働システムを進めていくことにより、地域にとっても利益が十分にあるのではないかと考えたものです。

そこで、今回のテーマである、コミュニティ･スクールなど学校を核とした地域コミュニティの活性化ということになります。お手元のＡ４版横のカラーの資料をご覧ください。真ん中の一番上に平成３０年度からの弘前市教育委員会の方針「みんなが学ぶ、みんなと学ぶ、みんなに学ぶ」を掲載しております。その下には、教育自立圏の構築の二本柱である、小中一貫教育とコミュニティ･スクールを含む地域学校協働システムを進めていくということを記載しております。

その下の真ん中の緑色の大きな輪の中は、地域とともにある学校というイメージで、イラストの児童生徒を囲んで教職員、保護者、住民が連携･協働して、さらにはその外側にある左側の卵型の丸の中には、ＰＴＡ、文化･スポーツ団体、大学、消防、警察といった関係機関、右の方にまいりますと、町会、あるいは地域づくり団体やＮＰＯ法人などの活動団体等、企業、それぞれが手を繋ぎあって地域の子どもたちは地域で育てるということをモットーに地域とともにある学校を作っていきましょうというものです。

このような形で、学校を核とし、個人や団体が連携･協働して学校や地域の課題を解決することにより、学校にとっては、家庭や地域住民の理解を得ることで教育活動が充実し、教育の質の向上に繋がっていくことになり、地域にとっては、子どもや学校とともに

活動することで、地域の活性化や生きがいづくりに繋がり、コミュニティの活性化を図ることができるという、学校･地域それぞれでＷＩＮ－ＷＩＮの関係をつくりあげたいというものです。

そして、教育委員会とありますが、様々ある課題の中から①家庭と地域の役割、②特色ある教育活動の推進、③教育の機会均等の保障、④子どもの安全･安心、教育環境の確保、⑤子ども･教職員の多忙化の解消、⑥いじめ･問題行動･不登校の未然防止と早期対応、⑦学力の向上　までの７つに絞り込んで四角い枠で囲んでおります。①から⑦まで区分けしておりますが、枠を超えて複数が絡み合うような形になると思ってもおります。また、この課題の下には、解決するためのキーワードを記載しておりますが、このキーワードももっとたくさんあると思っております。あくまで現段階のものということをご理解いただきたいと思います。

その下の囲みには、キーワードに対して教育委員会が行っている事業名を記載しております。こうした事業を教育委員会が行うことで、地域とともにある学校を下から支えているというものです。

この資料を基に、地域でできることは何かということをテーマに教育創生市民会議で話し合いをいたしましたが、本日は時間の関係もございますので、主に①と②について共通理解を深めていただければと思っております。

まず①家庭と地域の役割でございます。

近年、家庭や地域の教育力が落ちてきていると言われています。このことは、核家族化が進み、両親共稼ぎという家庭が多くなっていることなどから、家庭においてしつけが不足していたり、地域における繋がりが十分でなかったりと、ともすれば、学校任せになってしまっているということも一因になっているものと考えております。

こうした課題を解決するためのキーワードとして、子どもの居場所づくりであったり、地域の行事に携わる方々の主体性を誘引することであったり、地域のネットワークづくりなど様々ありますが、家庭･地域の役割をきちんと位置づけした上で学校や地域において広く周知していかなければならないと考えております。

続いて②特色ある教育活動の推進でございます。

弘前で生まれ育った子どもたちが、自分達の故郷に自信を持ち、どこにいても弘前市出身ですと胸を張って言うことができる人を育て、やがては弘前の将来を担うひとづくりを進めていく必要があると考えています。そのためのキーワードといたしまして、郷土への愛着を深めることであったり、歴史、文化芸術、文化財の活用と理解、継承をすることであったり、それから各地域の人材、指導者の育成、またその地域の調査研究などをして、結果を発表・発信することを地域の方々と一緒になって行うことが必要なのではないかと考えているものです。

説明は以上となりますが、このイメージ図は、今後さらに会議を重ね、内容を深めながら変更を加えてまいりたいと考えています。

以上でございます。

○市長（葛西憲之）

今回、ひろさき教育創生市民会議においても委員の皆様から意見を伺ったということですが、どんな意見があったか教えてください。

○教育長（佐々木健）

２月８日（木）にひろさき教育創生市民会議を開催しました。テーマが「地域コミュニティの活性化について」、副題が「地域とともにある学校」ということで、様々意見交換しました。

その中で①と②について意見をご紹介したいと思います。

まず１つは、「地域の人材の活用やデータバンク化」がございました。最近は、地域のコミュニティが疎遠で、自分自身の町会でも隣人同士の関わりが希薄なところが多く見られる。しかし、その中に、大変すばらしい方・力を持った方が隠れている。そのような人材を見つけて、教育に助力してもらってはどうかということ。

同じような意見でしたけれども、地域に埋もれた多彩な才能や能力をもった人材の発見と、その力を発揮しやすいような環境づくりが必要である。

３つ目として、英語いわゆる外国語や部活動の支援について、ボランティアではなく、ある程度のお金を払って助成等を行うことで、放課後の指導や英語等の学習支援がより活発になるのではないかと。

ほかに、放課後の居場所等について。特に居場所として、子ども食堂や地域の施設、学校などの積極的な開放が挙げられました。

市民や地域の人が分かるように、学校の空き教室・公民館・児童館・交流センターなどの開設、活用方法などをもっとアピールして、積極的に活用してもらうべきであると。

それから、主に子ども食堂に関する部分でございますが、貧困家庭･ひとり親家庭に対する支援、孤食の防止、あいさつなどをすることで、社会性が身について、勉強を教えてもらうとか、食事を楽しめるなど効果が大きいのではないか。

それから、施設設備の開放に併せて、人が集まれば人を知って、地域を知ることになるのではないか。

次に、各家庭の現状から、地域ができることを考えていくような情報共有の場があればよいのではないだろうか。

その他の意見として、特にコミュニティ･スクールの積極的な情報発信、市民が分かるような広報。現在、教育自立圏のモデル校を４中学校区で行っておりますが、モデル校以外のエリアにもそういう情報発信をして欲しい。そのほか、コミュニティ･スクールが出来てからではなくて、随時情報を出して欲しい。

このような意見が主に出されております。

○市長（葛西憲之）

ありがとうございました。

地域コミュニティの活性化ということについては、平成３０年度から始まる次期計画のリーディングプロジェクトに位置付けているわけであります。地域と学校がどのように連携･協働するかについて、教育委員会の考え・市民の考え両方が出たわけで、この会議で地域ができることは何かについて焦点を当てて方向性を深めていければいい。その

ように思うわけであります。

これまでいろいろな成果あるいは課題が提示されましたので、これについてまずは議論を深めていきたいと思います。

今まで出てきた説明あるいは意見等についてご質問等あれば伺いたいと思いますがいかがでしょうか。

特別なければ、さっそく議論に入って行きたいと思います。

先陣を切ってどなたかご発言される方いらっしゃるでしょうか。

○教育委員（前田幸子）

先ほど説明いただき、意外と細かい部分に目が行き届いているなと感じられます。さらに、リーディングプロジェクトの資料も拝見すると、非常に全ての大切なことが網羅されているという感じがしました。そうすると、どうやったらリーディングプロジェクトの下にある教育委員会の中身がもっと充実していくか、ということを考えていかなければならないと思いました。

それを両方着ぐるみのようにしていったり、寄木のようにしていくことで、がちっとしたものができあがるだろう。ただ項目だけを並べていくだけでは、やはり、漠然として、何から取り組めばいいのかよく分からないので、今年度は、このいっぱいある中の「これ」を重点的に絶対やりますよということをある程度縦の組織の中で決めていって、それを地域とか学校に発信していけばどうか、というのが私の考えというか提案です。

○市長（葛西憲之）

リーディングプロジェクトとはいってもですね、項目として施策はあるけれども、これが横とどのように繋がっていくのかということについて、なかなか見えない部分がある。これとこれはこう繋がるので、これに重点的に力をいれながらそういう効果を高めていく、こういうものをまず見つけ出してみて、そしてそれを中心にして、この取組を、今年はこれ、次年度はこれ、そういうような取組みをしていけばいい。そのようなご意見だったと思いますが、やはり１つの項目だけでこれから何かできるか、子どもたちの、あるいは大人たちの、あるいは地域全体の力の高まりというか、活力が生まれてくるか、このようなところには、１つの施策ではやはり限界があると思います。それらがどう相乗効果を持って高めていけるか、そういったことを考えたときに、どういった事業をその中からチョイスしましょうかという、その点についてのご提案とか。

○教育委員（前田幸子）

チョイスはちょっとまだ。

○市長（葛西憲之）

今の言ったご意見も含めですね、極めて私も重要なことだと思います。

やはり、相乗効果を高めていきながら地域の活力をもっていくと思うのです。その辺りをどなたかご意見いただければと思うのですが。

事務局のほうで何かこういったことで確認しておきたいところがあれば。遠慮なくお話いただければ。

○教育長（佐々木健）

市の経営計画にも地域コミュニティの活性化ということ、偶然ではないですけれども、教育委員会としても、教育自立圏、コミュニティ・スクール　地域とともにある学校ということで、考えている方向は、私は実は同じだと思っています。ただ、立場が違うだけで。例えば、小学校の統合の話が出ています。こちらで統合が考えられる学校に提案すると、地域が驚くわけです。「うちの学校、それほど子どもがいないの？」、「複式学級だって」。提案されて初めて、地域が、自分達の子どもが少なくなっていると感じるケースが非常に多いです。

子どもが少なくなっているのは教育委員会の問題ではなく、やはり地域の問題だと思います。地域の子どもたちが減っている、子どもたちが減るということは、地域に若い人たちがいなくなっている。若い人たちが家庭を持ったり家を建てたりしなくなっているということを、地域がもう少し真剣に考える問題でもあるかなと感じております。

そのために、１つは、地域が活性化を考えていくことをして、これは、経営計画とも合致する部分でございますけれども、じゃあ学校はどうしたらいいのか。

私は裾野中学校に校長として赴任しました。裾野地区と言うのは、最初に先生になって赴任したところです。ところが行ってみたら、あそこは修斉と草薙が合併してできた学校なのに、目の前に生徒がこれだけしかいないのか、と思ったのが最初で、これを何とかしなければならない。この地域の少子化を食い止めるために、私は何ができるかなと感じたところです。そのためには、子どもたちを地域の中にどんどん出してやって地域のことを勉強させる、逆に地域の人たちは子どもたちに地域の良さを感じてもらう。この地域でこれからどう生活したらいいかということを子ども達と共有するために、大人は子どもたちに夢を語る。そういう地域にしなくちゃいけないなと考えた４年間でした。

学校としてもう１つ考えたのは、学校教育では何ができるか。当然、子どもたちがしっかり学力を身につけることも大事ですが、このまちをどうしたらいいかを自分達で考えて価値を生んでいく、我々は担い手といいますけれども、私は担い手ではないと思います。担い手というのは、今あるものを継続させていくことだし、今ある大人の思いをそのまま子どもたちに背負わせることになる。そうではなく、我々は未来の作り手を育てていかなければならないのではないかと思うのです。そういう思いを地域の人たちと学校と情報共有していかないといけないのかなと思っていました。そのような意味で、広報活動といいますか、市民が分かるような広報がまだまだ足りないのかなと。コミュニティ・スクールって何？という市民の方々がいるので、どんどん情報発信して広報していかなければならないのかなと考えているところです。

○市長（葛西憲之）

ひととおり皆さんから、方向性を定める必要はないので、ランダムにお話いただければと思います。

○教育委員（澤田美彦）

今回の課題が「地域コミュニティの活性化～地域とともにある学校～」。これを三日三晩ぐらい考えてみました。結論はですね、地域を活性化する、その根本はやはり「人をいかに育てるか」。これは結局教育の根本ですよね。自分でそういう結論に至ったというの

は、やはり育っていないのではないかというのを日常生活で感じているからではないか。今の教育行政というのは、どちらかというと、世論の流れとかあるいは経済界の要望、それに沿ったようなもので、例えばゆとり教育が１９８０年代にどうのこうのとか習っていると思うのですが、最近の事を見ても情報化社会ですから、それに対応しなければならないというので、子どもたちにパソコン、プログラミングを教える。そしてそのうちにグローバル化してきた社会、世界に対応するためには、英語教育が必要だというのでやらせたりとか。ゆとり教育は反省して脱ゆとり教育とか。すごく揺れ動いているのだと思います。

結局子どもたちに何が必要かではなく、むしろ、大人の目線で考えたらできた方針ではないかなと私は思いました。

そして、教育の大部分を学校に押し付けている。社会ではやらせない。企業ではやらせない。みんな学校に押し付けているような印象を持ちました。

さっき、事務局のほうの説明にもあったのですが、やはり核家族化、少子化。弘前も今高校生が１６００人ぐらいです。中学校で１５００人、小学校低学年で１２００人です。子どもは１１００人しか生まれていません。どんなに頑張ってもこのままいきますので、少子化というのはこれからすごく進んでいきます。そして、家族間の触れ合いは少なくなる。同時に、家族力、教育力がすごく低下している。私は看護専門学校の教育にも携わっているのですが、高校を卒業してきて、入学してきた人たちを教育するのに、まずはしつけから入ります。ここ何年間か看護教育に関与して、最初からその場にふさわしい行動が取れるのかどうか、その場にふさわしい服装をちゃんとできるのかどうか、その辺りからしつけをしていかなければならない。そこが足りないと私は感じているのです。それから、医学部を卒業してきた人たち、研修医で、最低で２５歳です。でもしつけや教育が必要なのです。結局何が問題かというと、家庭での親の教育、教育者としての親の役割、それが不足していると。結局、親としては、自分がどのような生き方をしているのかを見せていないのではないかと言う気がするのです。よく、子どもに対して背中を見せて育てると言う昔の大工みたいなことを言うのですけれども、やはり親の背中を見せて、子どもをしつけていくと。そしてどういうスタンスで子どもに接したらいいのか、そういうことが実際は、なされてないのではないか。個人的な意見なのですが、私は自分の子どもに対しては、何かあったら最後に帰って来いと言って出しているのですが、やはり、家庭というのは、いつでもどんなことをしても帰って来れる、という教育が私は必要なのではないかと思うのです。それが、見ていると、何となくなされていないのではないかと。そのような気がします。

学校は学校で色々なことを押し付けられる。例えば、昔は大学で何を勉強してきても市役所で研修を受けるからいいんだ。とにかく、やる気がある奴が来ればいいと言うのですが、今はむしろ途中採用とかが多くなって、それを高校に押し付けてきている。主体的学習とか、対話的学習とか、ある意味今まで企業がやってきたことを学校に押し付けているのではないかと。その結果、学校はやることがたくさんになってしまった。それが多忙化に結びついているのではないかなと思います。

社会はどうか。地域はどうか。地域は、昔みたいに地元で仕事をするのではなく、朝早く出て行き、何をしているか分からない人が弘前市でさえたくさん出てきている。そうなると、地域の連帯感というのが生まれないのではないかと。地域の連帯感がなければ、なかなか人が集まらないのではないかと思いました。

その結論として、人を育てる。その根本はやはり家庭で、親が子どもに対して、どう生きるか。一番小さい社会を形成して、その中できちんとやっていく。そして学校に出す。そのようにしてやっていかないとダメなのではないかなと。

○市長（葛西憲之）

教育や、学校のあり方そのものに対する根本的な問いかけということの意見でした。

○教育委員（高木恵美子）

私も、地域の差というか。私自身街中で生まれ育って教育を受け、今高岡地区にいるのですが、時代もあるとは言え、同じ弘前市の中でも、地域のコミュニティの格差と言うか、もちろん人口比もあるのでしょうが、世代の比、地域で格差がとてもあると思います。一概に地域コミュニティしていきましょうと掲げたところで、その地域で一つのいいところも含め色々な課題が出てくるのではないかと。そこにマッチしたと言うか、地域に合った取組をプラスして行政とやっていったほうがいいのではないかなと思っております。

また、澤田委員の話を聞き、ふっと感じたのは、高岡地区は農家が多いのですが、年寄りは、「農家をやらないほうがいい。何も儲けられない。どこかに勤めたほうがいい」と。どこかに勤めるとなると、そのうち結婚して街中に行ったり県外に行ったり。後継者と言う点では、大人が、農家という仕事にやりがいがあるという姿勢を、小さいときから言われていれば、将来像も変わってくるのではないかと思います。

親の教育という点で見れば、日々の生活の中での、親の意識というか、生活の中でどのように自分の生き方を楽しんでというか、笑顔あふれるまちに弘前はなっているな、という市民の活動も、そこにプラスしていったら親の意識付けも大事なのかなと思います。そうしていくことにより、大人になりたいなとか、ここに生まれてよかったなと思えるような、ここの地域でよかったと思える子どもたちをどんどん育てていく流れができていくと思うので、教育と言う面からも、ともに取り組んでいきたいなと思っております。

○教育委員長（九戸眞樹）

昨年、商工団体の方たちに講演をいたしました。皆さんに「最近学校に行った人いますか？」と聞くと、お子さんがある方はＰＴＡで、運動会でと答えますけれども、ほとんどの方が学校に行っていませんでした。今、学校の中で何が起こっているか。どこに困っているかについてほとんどの方が知りませんでした。その後、私が４年間学校訪問して得た知識をお話しすると、皆さんびっくりするのです。なぜそうなったかと考えてみますと、歴史があって、一時不審者が出たこともありましたし、防犯カメラをつけるなど学校が人を遠ざけた時期がありました。また、ＰＴＡとか長く居座る方がいたりで、誰でもオープンで行けるような場所でなくなった時期があったと思います。私達が学校訪問をし始めたときは、パソコン教室に鍵がかかっているのが普通で、図書室には今も

かかっているところがあります。なぜかというと、学校予算の中で繰り回していかなければならない。パソコンの修理ができる人は地域にもいます。でも、一般の人たちが入る術を考えなかったのかなと。

私は常に、今生きている、今できることという立場から考えていくので、この知らない現状も、もっと縮めていく方法があるのではないかなと。それが、知らせ方、もっと平場で話せるようなやり方、どちらかといえば、教育も、完成したものを出すという感じです。途中でプロセスを見せながら、見てもらいながら、もっとフレキシブルにやれないかなと。忙しい我々にそれを言われてもと先生方が言いそうですが、そのために今コミュニティやコンダクターが入ると思うのです。だから、常に何の世界でも通訳あるいは、案内役が必要で、今、コミュニティスクールの中でお役目に入る人の仕事はそこなのです。リーディングプロジェクトを見せていただいて、よくここまでまとめたと思います。だけど、一般の人には目にすることがない。関係ないので、もっともっとやっぱり普段の私達が使うことばで示していくということは、大事なことだと常日頃考えております。

○教育委員（澤田美彦）

私も賛成です。学校訪問に行って、どこかの学校が、父兄だけではなく地域住民全てに印刷したものを全部に配っていると言うのです。ああいうのが必要だと思うのです。学校に来ているのだから教えるのではなく、来ていない人にもみんなに印刷したものを配り、学校で何をやっているのかを教えている学校があるので、地域を巻き込んでいく一つの方策としてやっていけばとてもいいと思うのです。

私自身のことを考えてみても、商業的な広告ではなくて、自分が何をやっているのかをみんなに知ってもらうことがとても大事だと思います。やはり中学校の子どもがいる・いないに関わらず、地域全体に対して情報を発していくことがとても大事なことだと思います。

○市長（葛西憲之）

ありがとうございました。今、いろいろお話が出ました。かなり拡散したので。

子ども達自身の発信のお話もあるし、実際減っていることについて、この地域の人たちがどの程度知っているのか。私もこのような仕事をしているから分かっているのだと思うのですが、そうでないと、子どもが減っていて、学校がどのような状況にあるのか分からないです。

今言った視点が大事で、そのことを学校という仕組みの中で、様々な周知を図るというのは、極めて重要だと思います。私の住む地域の中学校も、情報が毎戸に来ます。子どもがいる・いないにかかわらず来るので、よく楽しみに拝見しています。普段使いのことばで周知をしていくということは、地域をどう巻き込んでいくのかに対して非常に効いてくると思います。

もう一つは根本的な話で、家庭での教育力というのが今問われているわけですよね。私の例で大変申し訳ないですが、中学生から離されると、どうやってたくましく生きていくのかが自然と身につきますよね。どうやればいじめられずに、うまく立ち回れるか。

貪欲に自分をアピールしたり、というような鍛え方をされますよね。そういったことについては、今家庭の中ではほとんど行われていないのだろうと思います。反面、毎回家に帰れば、誰しもがウェルカムで温かく迎えてくれるという条件が絶対必要なのです。だから、私は子どもでも孫でも私だけは見方だ。というような芯が一つないと家庭を持てないですよね。そういう視点で家庭を見て、そういった家庭をつくれるようにならなければならないですよね。ここはどうですか。あとは、地域からのアプローチということは、このリーディングプロジェクトとはまさにそうでして、地域が縮んでいくのですよ。とにかく、地域の担い手がいなくなるので、そこでの担い手とは誰なのか。といったときに、今はほとんどが町会です、町会長です。学校とのやり取りなんかもなかなか町会長というようなそのような役職だけでは対面でやれないという部分もある。じゃあ、ＰＴＡなんかは、若い世代は地域活動になかなか熱心でないということもある。今コミュニティ･スクールを打ち出すので、その中でリーダーとして、どういう人が生まれて、インタープリターになってそれぞれに伝えあって、活力を生んでいけるような取組をしていきましょう。というようなことを作り上げていかなければならない。そのときに、町会長の疲弊が問題になっているのです。なり手がいない。話を聞けば、次はいる。その先がいないと。次がいるのであれば、交代すればいいのだろうけれど、そうはなかなかならない。全然連続性がなくなる。なので、若い世代からトータルとして、地域コミュニティにいつも関わりあいながら、自分達の意思をどう伝えていくかというところに重きを置いたようなものも必要になってくると思うのです。そのときに学校の役割ってどういうものがあるのかと考えますよね。そういったところについて、ご意見もらえませんか。

○教育委員（前田幸子）

地域というのは、年齢層もすごく違い、また構成メンバーも違って非常にまとまりがない。希薄な部分が出てきているということが創生会議の中でも出ているというお話がありました。前にも聞いた話で、回覧版を隣の人に持って行ったら、うちは町会に入っていないので、うちを外して隣に行ってくださいと。そこで回覧版を持っていった人は挫折してしまったと。自分が町会にいることが阻害された感じでがっかりしてしまったというぐらい町会の希薄さというのがでてきている。それをまとめていかなければならない。学校もまとめていかなければならない。その核になるのが公民館なのではないかと思うのです。やはり、公民館活動の大切さというのは、活動をしていくことで、学校に歩み寄っていく、学校からも公民館の方に歩み寄っていくことによっていろいろな講座とかでの相乗効果や相互作用が生まれるのではないかと。だから、学校にとっても、そこでのいい人材を講座から連れて行く、公民館の方からの援助で学校のほうに連れて行く。やっているところも最近は多くなりました。すばらしいことだと思います。そこを中心にやることにより、地域の例えば弘前が自慢としているねぷたもそうです。よく言われていることは、青森は会社のねぶた、弘前は町会の、地域のねぷただと。これが違うと。ここで、弘前と青森の差があると昔の人は自慢げに話していました。そういうことが、ねぷたの運行にも繋がり、学校と地域と公民館とが一緒になって地域の一体化

が生まれてくるのではないかなと思います。

○教育長（佐々木健）

やはり、公民館って地域の核として、何かあったら公民館へという意味で、小･中学校は公民館との連携を核としていろいろな体験学習を行っています。ただ、ネックは、若い人たちがそこから切れてしまうのです。小･中学校のうちは公民館に行くことで、地域の人と交流があるのですが、高校生、大学生になった時にどこにいるかわからない。それがまた、地域の公民館や祭り、一つは祭りかもしれませんけれど、地域の核としての公民館のあり方がこれからとても大事になっていくのかなと思いました。

学校のあり方ですが、一つの目標として人材を育てていくと思うのです。その１つが弘前を愛する心を育てるということで、卍学ですよね。本当に子どもたちは弘前のことが分からないので、去年から卍学に力を入れてやっています。自分たちが住んでいるこの土地ってすごいところ。りんごってすごい。弘前っていいところ。という思いを育てていくための卍学です。そして、子ども議会も。自分たちのことを自分たちで解決していく。極端な言い方になりますが、弘前（このまち）をどうしたらいいんだろうということを自分たちで考えて、新しい価値を生んでいく。そのような子ども達、やはり集団づくりに力を入れております。これはただの学習集団ではなく、自分達の課題を解決していく、それもきちんと話し合い活動で解決していくような学級会、児童会、生徒会活動をやって、自分達できちんと話し合って、横の仲間意識を育てていくということが学校教育に求められていることかなと思っています。

○市長（葛西憲之）

今､家庭の教育力ということについて話題になったので､そういう視点で見たときの、学校と子どもたちの関わりの中で、家庭の中での意識を植え付けていくためにどうしていけばいいでしょうか。

○教育委員（澤田美彦）

なかなか難しいでしょうね。若い人たちの意識は変わっているということは明らかだと思います。ただ、変わった意識が悪いのかどうかというところも分からないと思います。例えば、私達が学生の頃、ビートルズが来たときに、親、爺さんからは「騒音でねが」と言われたのですが、今もビートルズの曲は名曲で、心を打つような曲がたくさん残っています。

読書はすごくいいことだ。スマホで見るだけでは、頭の中に教育されないのではないか、と今言われていますが、これも結論が出ていないと思うのです。あと３０年後に、実はこういう教育がすごく良くなったとか、そのようなことになると思うのです。ですから、私達の判断基準では、今の人たちはしつけがなっていないと思いますが、若い人たちがどう思っているかというのは、違う可能性がある。そういう若い人たちが入る青年会議所のもう一段若い人たちの意見を聞く場があれば、面白いと思うのです。ただ、そのときにも、ある意味目的意識を持った集団だけでやるとまた分かったような結論しか出ない可能性があるので、その時の人選をどうするのかが難しいですけれど。若い人たちの気持ちというのを、私達がきちんと分かっていないのがあると思うのです。です

から、何らかの形でそういう人たちが意見を言える場、意見を聞ける場を設けてもらえればいいと思います。

○教育委員（高木恵美子）

私も弘大生といろいろな事業で交流したり、事業に参加してみて、今の大学生ってこうなんだ、でも大学生って頑張っているな、苦学生なんだなということが多くて、どちらかというと遊んでいるのだろうなというイメージが多かったのですが、一生懸命頑張っている。弘前に来てよかったといっている県外の子達も多くて、交流を求めている人たちとも関われたので、やはり知らないというのは、何も分からない、質問も交流も知らないで過ごしてしまうと思うので、今の世代と交流する事業というか、場があればと思ったところです。

○市長（葛西憲之）

私もＹＥＧ（商工会議所青年部）だったりＪＣ（青年会議所）だったり、言ってみれば企業人として、訓練を受けた人たちとの対話はずいぶん行っております。しかし、そこから下というのが分からないのです。そのようなチャンスが無いといえば無いのですが、そこまで入っていけないという、多忙を理由にしているわけでもないのですが、そこはやはりあるのかなと思います。というのは、その世代が、子どもたちを学校に通わせている一番身近な存在としてあるのかなと思います。

今日、いろいろお話を承りましたが、是非そういったかかわり方を持ちながら、そういった人たちが町会の担い手として青年団を組織するにしても、地域の中で、子どもたちとのかかわりの中で、地域活動をしている中で、楽しみとか、活動していることのステータスとかに目を向けるような、そういう共生をしていかなければならないのかなと今思いました。

あと、子どもたちがどのように地域のことを学ぶかについては、極めて重要でして、それはどこの地域も、どこの自治体も一緒だと思いますけれども、特に弘前の場合は、周辺にある文化財だとかそういったものの数が半端ではないと思うので、特に地域での子どもの育て方というのは非常に教育面で大事な点だと思います。それが今卍学という形で教育委員会の方でよくよく旗をあげてくれたと感謝しています。これは、一つの教本としてみても優れたものですし、大人が見ても我々の誇りというものが伝わるものです。こういったことを通じて、子どもたちの郷土愛を育むことをまずは考えて、逆にそれが家庭に反映される（エコー効果）、これが大事だと思います。学校で子どもたちがいろいろなことを学び、卍学を通して地域のことを学び、そして家庭に帰る。家庭もやはりそのことに影響を受けると思うのです。そうすると子どもたちが中心になって、そういうものの広がりを地域にもたらすことができる。誰もが、子どもの話に対して耳を傾けざるを得ないし、それが一番だと思うので、家庭は、そういったところからもアプローチというのは極めて重要な話なのかなと思うのです。

そのようなことをやりながら、地域全体が何らかの形で意識を共有できるような場にしていくように、子どもたちを中心にして意識の共有化を図られていく。子どもたちを中心にしてやっていくという事が、意外にいいのかもしれませんね。

実は、私も高杉小学校の前の歩道整備するときにワークショップを行いました。そのとき、まず子どもたちを集めました。子どもたちを集め、用地買収をするために親を説得しろと言ったのです。そしたら見事にうまくいきました。

子どもたちのことに対しては耳を傾けざるを得ないので、そのようなアプローチの仕方で逆に地域をうまく盛り上げていくことは可能なのかもわからないですね。そういったことが、一つの大きな塊として出てくる。今度は地域社会の中で、行動･活動するといったときにその拠点を見つけなければならない。それが公民館活動だと繋がっていきますよね。

一つ一つの施策が、最後どこかに収斂させるような、子どもたちが最後は人材として育っていけるような、そのようなところに収斂させていくような連関の輪をいくつもいくつも描いていく。それをいつも頭の中において、重層的な輪をいくつも持ちながらトータルとしての大きな輪になって、厚みを増していく。そのような取組をしてくことによって、これからの子どもたちの人材という期待も高まっていくだろうし、地域の活力も上回ってくる。そのことによって、学校の多忙感にも少なからず緩和していけるのではと思います。

「公」「共」「私」がありますが、今の時代「公」と「共」を一緒にして「公共」にしてしまっています。公共事業ってそこから出ているのです。役人が勝手に作ったものです。役人が作ったというのは、公共事業って自分のテリトリーを広げるために「共」の部分まで勝手に取っちゃったのです。だからこのようなことが起こっている。私は「公」と「共」を離してしまう。そのことによって「共」が高まっていけば、というのが地域コミュニティでしょう。これを活力あるものにしていくことによって、もっともっとそこの部分で子どもを育てる、地域で育てていくことに繋がっていくのだと思うのです。それで、「私」と言う部分と「公」と言う部分の間に「共」を置いて、全体のまちを変えていくのがこれから大事なのではないかと思います。

そのような意味で、地域で子どもたちを育てていく時代を育っていくというのは極めて重要なことで、これを行っていかないと駄目なので、子どもたちを真ん中においてやることが一番効果的なのではないかなと思いました。

○教育委員（前田幸子）

私が、五中にいたときの生徒（生徒会長）で、今長崎県の対馬で今私達がやっているようなことを土台にして色々な地域づくり、公民館や学校等の繋がりを持ちながら、というのを一人で立ち上げてやっております。ここで学んで育った、育てたことが、対馬で生きてくる。その方自身は、これをやることによって弘前に何かしらの貢献をしたい、繋がりを持っていやっていきたいというのが最終的な目的です。このような意味でもひとづくりというのは、ここでできていると思いました。

○市長（葛西憲之）

是非またやりたいと思います。ありがとうございました。

午後 3 時 10 分閉会